



ボートレース（昭和2年）ゴールをめざして

今夏の甲子園大会の初出場校に、富山県立南砺総合高校福野の名を見つけ、同校にエールを送りました。同校の前身は富山県立農学校で、その草創期の校舎は本校旧日本館と同じく重文の指定を受け、「巖浄閣」として保存・活用されています。そのことはAcanthus第9号で紹介しました。同校の生徒諸君も創立以来の伝統を矜持に、活躍しているようですね。ところで皆さんは、本校の旧日本館を訪ねたことがありますか。展示室では、様々な分野で全国に名を馳せた先輩達の栄光の数々を目の当たりにすることができます。それらの中に、昭和45年インターハイ女子S級で、友部美恵子・宮崎敦子（高23回）が初の全国制覇を成し遂げた時以来のヨット部の輝かしい足跡もあります。同部の創設には、土浦中学校端艇部OBが深く関わっています。

今回はヨット部創設のきっかけになった土浦中学校端艇部について書きます。

♪ われは湖の子 霞ヶ浦を 駆け抜けた土中生の青春

『われは湖の子さすらいの……』、琵琶湖周航の歌（旧制三高寮歌）が、霞ヶ浦でしばしば聞かれた。歌うのは、「ボートに青春を懸ける土中生」である。夏休みともなれば、潮来・鹿島・銚子へと遠漕し、特に大正末から昭和初期が花の時代だった。彼らは、尻の痛みものともせず、フィックス式（固定式）七人乗りの端艇（短艇・ボート）で遠漕し、心身の全エネルギーを発散した。正に『オールを握らざるものは、亀城健児にあらず』だったのである。

端艇2・和船2で端艇部出航

端艇部は明治34年進修会の下に創部された。翌年7月、五人乗り端艇と和船を購入、前者に筑波・霞、和船に西施・亀城と命名した。37年6月、初の競漕会が行われた。和船競漕の後、五回に及ぶ学年対抗の端艇競漕が行われ、ここに土浦・真鍋両町や近隣の人々の関心の的となる一大イベント『水上運動会』の幕が開けたのである。この記念すべき第一回競漕会は、4年生（2回生）が優勝した。

創立十周年記念端艇建造事業

明治40年、創立十周年記念事業の一環として、進修会会長幸津国太郎（校長）は新艇の建造を企画、父兄懇話会に提案し、賛同を得た。更に土浦・真鍋両町を始め広く地域の有志にも働きかけ、土浦中学校創立十周年記念端艇建造発起人会の設立に漕ぎつけ、首尾よく七人乗り新造艇三隻・中古艇二隻を購入した。

記念式典は、40年12月1日、来賓三五〇余名の列席の下、挙行された。式後、午後零時半から『海国男子』の額が掲げられた艇庫前で新艇五隻の進水式を行い、それぞれ鹿島・香取・筑波・桜・霞と命名した。続いて、新艇による初の競漕が、学年毎に5回行われた。これを機に生徒のボート熱は一気に燃え上がりを見せた。一方では、早くも近隣の人々の注目の的となり始めた。翌年には、艇



ボート部艇庫と部員（明治44年）

庫付近は、大勢の観客で埋まった。この年の水上運動会は来賓や生徒用に三隻、審判係用に一隻の汽船を雇って開かれた。生徒達は学年内・学年間計7回の激しい対抗レースを繰り返した。加えて、水戸中学の選手や来賓・卒業生・職員混合競漕も行われ、盛況の裡に幕を閉じた。

ボートレースの過熱とトラブル

やがて、艇は部員以外の一般生徒にも開放されたから、部の活躍に留まらず校内のボート熱は更に高まり、特に学年対抗レースは圧巻で、対岸の応援歌と太鼓の響きがいやが上にも湖上の選手を奮い立たせた。レースへの生徒の過熱は、勝敗によっては、上級・下級生間でトラブルを起こしたりした。それを慮った審判が敢えて上級生に有利な公正を欠く判定を下すことすらあった。明治44年のレースでは、四年生が五年生に二分の一艇身差でゴールしたが、五年生の優勝と判定した。当然、四年生は憤懣やるかたなく、高田保（中12回）が中心になって抗議し、全校生徒大会にまで発展した。こうしたトラブルが重なってしばしば大会が、実施されないこともあった。

九月一日の悲歎 新艇到着せず

こうした事態の中でもオールを握りたい生徒達の熱意に応え、新艇三隻を建造することにした。艇名も定め、8月31日の到着を心待ちにしていたが、その日、新艇は川口にその姿を見せなかった。しかも翌9月1日、突如襲った大地震は、学校中を不安に陥れた。心配は的中、地震騒動が一段落しても三艇の行方は杳として掴めなかった。半ば諦めながらも、安着の望みは、捨てなかった。その甲斐あつてか、一カ月後、10月27日、突如汽車便で新艇三隻が届いたのだ。学校は歓喜に包まれた。ほぼ一カ月練習に励み、11月24日、上大津村の弁財天付近で久しぶりのボートレースが喜びの裡に開催された。

端艇部廃部とプール建設

川口川付近の整備が計画され、昭和10年土浦港の築港と護岸工事が行われた。太鼓橋の架設に伴い、盛り土が120センチほど高くなり、湖岸にあった艇庫からの艇の出入りが難しくなった。色々な工夫を試みたが、端艇部の存続は困難となった。代ってプールの建設案が浮上した。水泳部は、進修会の傘下になかったが、力をつけていた。霞ヶ浦での練習は、ワイルド病の危険に晒され、プールの建設が望まれていた。遂に、進修会は、端艇・艇庫の売却代金と端艇部の基金を基にプールの建設を決議した。こうして土浦中学校端艇部の歴史は閉じたのである。代って県下でも稀有な25mプールが誕生した。

懐かしいボート漕ぎは、重労働

土中25・26回卒業の端艇部有志が、昭和28年艇友会を結成し、再びボートを浮かべることになった。しかし、既に四十路を越えていた先輩達は、『この年で、ボートを漕ぐのも重労働だ』のボヤキと共に、『海軍払い下げのカッターに帆をかけて走った』ことを思い出し、思いは急速にヨットへの乗り換えに傾斜し、会の名も霞ヶ浦ヨットクラブと改称した。このクラブに団体で使ったヨットが払い下げられた。クラブは、このヨットの寄贈を母校に申し出た。これをきっかけに土浦一高のヨット部が誕生したのである。